

京都大学	博士（文学）	氏名	蔡 毅
論文題目	清代における日本漢文學の受容		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>これまでの日中漢文學交流の研究は、大部分が中國古典文學の日本漢文學に對する影響を重視しており、日本漢文學作品が中國に傳わり、様々な反響を呼んだという史實については、問題にされることが殆ど無かった。文學交流は雙方向に影響し合うという視点から出發し、この一種の「逆輸入」現象に檢證を加えることは、中國古典文學研究と日本漢文學研究の中に含まれるべき課題だろう。唐代から明代までの時期については史實にまだ更なる檢證を要することから、本論文は輪郭が概ねはっきりしている清代（おおよそ江戸、明治時代に相當する）に焦點を合わせ、日本漢文學、即ち漢詩や漢文の清代における傳播の軌跡を尋ね、東アジア漢字文化圏の中のこうしたフィードバック現象が持つ文化的意義を明らかにしたい。</p> <p>本論文は序章、本論四章および終章から成る。序章ではこの主題を選んだ由來を説明する。本論の第一章、第二章は漢詩論であり、それぞれ江戸時代と明治時代の日本漢詩の清代における傳播について検討する。第三章は漢文論であり、頼山陽の『日本外史』が如何にして中國へ渡ったのかを検討する。第四章は附論であり、日中の漢籍交流の代表的な例として、市河寛齋の『全唐詩逸』の西傳の過程を検討する。終章ではこの課題の學術的意義について総合的な分析を行う。</p> <p>序章ではまず江戸末期の日本の僧侶月性の名作「將東遊題壁（將に東遊せんと壁に題す）」（「男兒立志出鄉關（男兒志を立て郷關を出づ）」）を挙げ、この詩が中國では長期に渡って毛澤東の作品であると誤認されていたことを指摘し、この誤傳の原因を考察し分析した後、これを契機として、歴史上の日本漢詩乃至漢文の西傳の軌跡を辿り始め、日本漢文學の中國への「逆輸入」という學術的課題を形成するに至るまでを述べる。</p> <p>本論の第一章は、「間接交流の時期——江戸時代」である。江戸幕府が鎖國政策を實施してから、日本人は海外への渡航ができず、日中の文化交流は主に雙方の書籍の貿易および長崎を訪れた清朝の商人個人と日本の文人との交流に依存していた。本章ではまず長崎で發見された清の商人江芸閣と沈萍香の五十二通の書簡を證據とし、書簡の内容に對する考證を通して、頼山陽の『日本樂府』が迅速に中國へ傳わり、なおかつ錢泳等中國の文人から高い評價を受けることができた理由を明らかにした。それは清の商人が市場で購入してそのまま持ち歸ったという偶然の爲せる業ではなく、唐通事水野媚川が清の商人江芸閣、沈萍香に積極的に推薦して手を盡くした結果であり、そのねらいは、『吾妻鏡補』の作者にして日本研究の集大成者である翁廣平の推</p>			

薦を受け、『日本樂府』を著名な『知不足齋叢書』に収めることであった。この史實の解明は、ある側面から、当時の日本が文化的宗主國である中國に對し積極的に発信し、對等たることを求めたという歴史的動向を説明している。

次に、江戸時代の特殊な現象——唯一海外経験のある「漂流民」を例にとり、これら漢詩と無縁に見える普通の船乗りが、どのように日中漢詩交流の爲に特殊な貢獻をしたかを考察する。福井地区の寶力丸の船乗りが遭難して上海に漂着した後、中國側の當地の官吏から贈詩を獲得しており、その後日本の關係する人々たちの和詩があり、そうした作品は『漂流人歸帆送別之詩』に編まれた。これらの作品の解讀を通し、江戸後期の「華夷」意識の變遷およびそれが日中文化交流史上に持つ意義を検討する。

第二章は「直接交流の時期——明治時代」である。明治維新によって鎖國が解かれ、日中の文人は相互に訪問し合うことができるようになり、日本漢詩の西傳も空前の盛況を迎えた。この時期は、更に二種類の状況に分けることが出来る。一つめは、中國の文人が來日し、明治の漢詩壇に様々な直接的な關係を持ち、その中から新鮮な體驗や變革への啓發を得たというものである。

一つめの状況について、まず清朝の初代駐日公使館參事官黃遵憲の日本漢詩の見聞歴を考察した。彼は中國の近代詩人のうち傑出した者として、『日本國志』や『日本雜事詩』の著作時に大量の日本漢詩を讀んで参考とし、また森春濤、森槐南父子や宮島誠一郎等、明治期の漢詩人と頻繁に交流しており、これらのことはいずれも、彼が明治時代に流行した「文明開化新詩」に相當の理解が有ったことを證明している。このため、彼が日本を離れイギリスで創作し廣く好評を得た「今別離」等の「新派詩」は、明治時代の「文明開化新詩」の影響を受けている可能性が高く、これは日中漢詩交流史上、それまでに無かった逆轉現象であり、注目に値する。彼が日本に滞在中には何故これら流行の作風に手を染めなかったのかと言えば、中華傳統文化の守護者として、當時保守派から傳統に叛くものであると見なされていた新詩の創作活動に介入し難かったことによるであろう。

次に、葉燁と陳曼壽の日本での文化活動を考察した。この二人のごく普通の中國文人は、來日後、明治漢詩人との詩歌交流を通して、日本漢詩に對し強い關心を持ち、日本漢詩集の編纂に着手した。葉燁の『扶桑驪唱集』には彼自身と日本の友人の唱和の作が収録されており、作者は計四四人、詩は一三七首である。『煮藥漫抄』は詩話の形式で彼と日本漢詩人との交流に関する逸話を記録している。陳曼壽の『日本同人詩選』に収録されている日本漢詩はより多く、作者は計六二人、詩は五九九首。これは中國人の編纂した初の日本漢詩選であり、日本漢詩の中國への「逆輸入」史上、重要な意義を持っている。陳曼壽が編纂したものは、やや後に出版された俞樾の『東瀛詩選』と比べると作品量、知名度、影響力共に比べ物にならないが、現地で収集した獨自の特色は、やはり賞賛に値する。

更に梁啓超と明治時代の「漢詩改革」の關係を考察した。梁啓超は清末の「詩界革命」の提唱者であるが、この中國三千年の詩歌史の最後のひと調べとなった文學運動は、日本とどのような關係があつたのだろうか。この問題について、未だ探求した者はいない。梁啓超は一八九八年戊戌變法に失敗して日本に亡命し、一八九九年十二月に「詩界革命」の提議を行い、漢詩の中で西洋文明を吸収した新しい内容を表現し、「和製漢語」に現れる新しい語彙を用いることを主張した。實のところ彼が來日する以前、明治時代の漢詩壇には既に「漢詩改革」に關する議論が多くあり、その獨創的で型破りな主張は梁啓超のものと非常によく似ており、具體的な創作上の實踐としては、同じく「詩界革命」の重要な參加者であつた黃遵憲が見た明治期の「文明開化新詩」があつた。このような背景のもと、梁啓超はこのような漢詩の新しい潮流の影響を受け、「詩界革命」の發想を生み出した可能性が高い。彼がどこから啓發を受けたのかを何故明言しなかつたかと言えば、中國文人の自尊心に起因し、日本の漢詩に學んだと語るのを恥じたからであろう。彼自身の言葉で言うならば、つまり「中國文學の名譽」を守る爲である。

二つめの狀況は、中國の文人が來日はせず、本土において日本漢詩と接觸したというものである。これは最も嚴格な意味での日本漢詩の「逆輸入」と言えるかも知れない。最初に、俞樾の編纂した『東瀛詩選』について考察した。この書には計五四八人の作者の五二九七首の詩を收め、中國人の編纂した最も規模が大きく、かつ最も著名な日本漢詩の選集である。俞樾は何故この書を編纂したのか。どのように編纂し、如何なる特色があるのか。版刻はどのように行われ、出版後の實際の影響はどうだったのか。この重要な典籍に纏わる上記のような基本的な問題について、これまでの研究は詳細を盡くしていない。よつて金澤常福寺所藏の岸田吟香の書簡等の一次資料を手がかりとして、全面的に深く検討を行った。

次に潘飛聲撰著の『在山泉詩話』について考察した。中國の詩話類の著作の中で日本漢詩への言及が最も多いものとして、同書を推すべきだろう。書中には潘飛聲が様々な異なる道筋を通して、或いは日本漢詩人と接觸し、或いは日本漢詩作品を見聞して感じる所があつた事が記述されており、中でも彼がドイツのベルリンで教鞭を執っていた時期の井上哲次郎、金井秋蘋との付き合いおよび漢詩のやり取りは、日中の文人の第三國での漢詩交流であり、異郷での美談と言つてよい。

更に李長榮の編纂した『海東唱酬集』について考察した。李長榮は廣東に居ながら明治期の漢詩人と多く交流を持ち、彼らが海を隔てて應酬した作品が、李長榮によつて『海東唱酬集』として編まれ、日中漢詩交流史上最初の、雙方の唱和作品のみを専らに收めた詩集となつた。彼は訪日を計畫したが突然の逝去によつて成し得ず、『海東詩話』が撰著を計畫されながら未完成に終わったことは、日中の文壇にとって残念な出來事となつた。

第三章では頼山陽の『日本外史』を例として、日本漢文の中國への傳播について檢

討した。『日本外史』は上海を訪問した船員が携帯していたことや、北京に駐在した使節の贈り物、市場での書籍販賣など、様々な方法で中國に流入し、廣州、上海で重刻再版され、相當に廣い反響を得た。上海の文人錢懌がこの書の再版のために作った一七三三條の講評、杭州の文人譚獻のこの書に對し繰り返し行った評議、そして黃遵憲『日本國志』や王先謙『日本源流考』が撰著時にこの書を大量に引用し参考とした事、全てがこの書の中國での影響の廣さと深さを物語っている。『日本外史』は當時中國で最も廣く流通し、讀者の最も多い日本漢籍であり、賴山陽はその優美で流暢な文章により、中國の文人と誤認された事さえあった。

第四章は附論として、市河寬齋『全唐詩逸』の西傳過程を考察した。清代康熙年間に『全唐詩』が世に出てから、最も早くそれに對し補遺を行ったのが、江戸の文人市河寬齋であった。彼は日本および朝鮮の漢籍の中から、詩七二首、殘句二七九句の『全唐詩』に未收の作品を収集した。このように所謂「域外漢籍」を用いて中國の典籍の補遺を行うという文獻整理は、日中漢籍交流史上、創造的な意義が有り、また編纂者が着手時點から中國へ傳えたいという意志を持ち、數十年を経た後ついに願いを果たしたというドラマチックな故事は、尚更佳話となった。

終章では日本漢文學の西傳の文化的な意義を總括し、この種の「逆輸入」現象が、日中文化交流史について言えば本と末、強と弱の關係の中で起こる雙方向の影響を體現し、中國人の日本認識について言えば、肯定的な認知價值を持ち、近代中國の文學革新について言えば、啓發と促進の積極的作用を引き起こしたことを指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、江戸から明治にかけての日本漢詩が、中国にいかに関心され評価され受容されたかというテーマについて、筆者自らが渉猟した資料を活用しつつ詳細に論じたものである。筆者自身の問題意識として序論で明確に述べられる通り、従来の日中漢詩文交流史の研究は、中国から日本への影響力に関する研究は数多く存在しても、その逆方向の、日本の漢詩文が中国に受容された事象は近代以降に集中し、清代以前の諸相については研究のみならず、資料の存在に注意が向けられることすら極めて稀であった。特に中国においては、日本で作られた漢詩を中国詩の延長線上に捉え、日本の書記文化に根を下ろした文学の一つとして捉える見方は殆ど存在しなかったと言って良い。当該問題に早くから着目し、多くの新資料を丹念に渉猟して来た論者による本論文は、そのような研究上の空白地帯に分け入り、日本という場で独自の発展を遂げた漢詩文が、中国に還流し新たな動きを形成する端緒を丹念に描き出す。今後の研究にとって、確かな道標となる論文と言える。以下、論文の構成に則してその特色と意義を述べることにする。

本論文が標題で謳う「清代」は、日本においてはほぼ江戸時代と明治時代に相当する。日本における時代区分に基づき、論文は江戸時代を「間接交流の時期」と位置づける第一部と「直接交流の時期」とする明治時代を論じた第二部に大別され、第二部はさらに交流の場所を日本と中国に分けて論じられる。これらは人的交流に主眼を置いて議論を展開する部分であり、その議論を踏まえて、第三部と第四部は、日本文人の著作が中国に伝播する有様を、頼山陽『日本外史』と市河寛齋『全唐詩逸』を核として論述する。このように、日本と中国における漢詩文の交流を、時代と人と場所という視点から詳論する手法によって、従来見過ごされてきた当時の日中人文間で行われた漢詩贈答の意味をあぶり出す。まず第一部は、長崎に残される、清商江芸閣と沈萍香が、長崎の文人であり唐通事であった水野媚川に宛てた書簡について、発見以降初めて精密に読解し、長崎における彼らと日本の文人との交流を明らかにする。頼山陽を始めとする江戸後期の文人が水野に中国の文人への取り次ぎを託した有り様や、頼山陽がいかに関心して同時代中国の学術を見定めていたのかなど、従来知られていない事実が浮き彫りになる。特に注目すべきは、頼山陽『日本楽府』を中国に伝え、然るべき文人（書簡中に名が上がるのは『吾妻鏡補』の著者である翁廣平、『知不足齋叢書』を編纂した鮑廷博）に売り込もうと働きかける水野の姿である。水野の努力は功を奏し、翁廣平は後に長文の序文を『日本楽府』に寄せることとなるが、この水野の行動は単なる好事によるものではなく、その背景には頼山陽自身の強い願望があったことも、論者によって明らかにされる。このような長崎という場を介しての日中人文間の積極的交流の背景には、当時の中国において日本からもたらされる漢詩文や典籍に強い関心が寄せられていたことを忘れてはならない。この問題は、頼山陽『日本外史』への中国人による評点本の刊行を論じた第三部、市河寛齋『全唐詩逸』が『知不足齋叢書』第三十集に収められるまでの日中双方の文人の応酬を論じた第四部において

も、引き続き精密に論じられる。このような日中双方の文人の密接なやり取りを詳細に描き出すことは、各地に残された資料を博搜して研究を重ねてきた論者であって初めて可能な成果であり、その参照価値は高い。第一部第二章ではさらに、漂流民を巡って日中間で交わされた詩の応酬を取り上げる。これは論者が初めて見出した資料であり、特に日本の越前藩士が中国側に与えた漢詩の読解を通して、その中に華夷転変の思想がうかがえることを明らかにする。中国人が読むことを想定して書かれ、しかも地方藩士によって書かれた漢詩に華夷転変の意識が浸透していたことを示したのは、当時の思潮を探る上でも貴重である。このように、論者の分析は日本と中国の文化的位置づけを常に念頭に置いて丁寧に進められており、漢詩文という媒体で知識の往還が行われていたことを資料に即して描き出す手法は、大きな説得力を有する。第二部では、明治以降に日本に来航した中国知識人によって編纂された日本漢詩集が主題となる。従来、俞樾によって編纂された『東瀛詩選』はよく知られていたが、それに先んじて実際に日本に訪問し自身の手で日本漢詩を収集した陳曼壽の『日本同人詩選』が有ったことを、第一章第三節において彼の伝記記事を発掘し詳細に検討する。詩集編纂の背景には多くの日本文人や政治家との交流が有ったこと、その中の一人は、後に俞樾『東瀛詩選』編纂において多大な影響力を発揮した岸田吟香であったことも指摘される。論者は金澤常福寺に所蔵される岸田吟香の書簡等、貴重な一次資料を用い、当時の中国文人が日本漢詩集を編纂する上で日本側文人が如何に働きかけたか、それを中国文人が如何に受容したかについて、綿密な考証を加える。その結果、俞樾以降に編纂された日本漢詩集を通して、日本漢詩に対する意識変容の過程、および日中人文間の唱和詩集の嚆矢である李長栄『海東唱酬集』成立へと続く道筋が明らかに示される。このように、論者自身が発掘した新資料、また存在は知られながらも放置されてきた一次資料に光を当て、今後の研究の基盤と成し得たことは、長年日中の漢詩文を読み込んできた論者ならではの業績である。

以上の通り優れた論考であるが、さらに望みたい点は有る。論者は間接交流・直接交流という軸で論を進め、近世から近代に到る通時的視点は提示されたが、それぞれの時代環境の特性を明らかにした議論、朝鮮を含む東アジアにおける漢詩の位置づけを論ずる視点があれば、より充実した東アジア漢詩文論となったであろうと惜しまれる。しかし、それらは本論考の大きな成果を減ずるまでの問題ではなく、寧ろ本論考を踏まえた後進の手に託された課題と見なすべきであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和3年9月16日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。